

第22章 主要産業の動向と AFTA 及び FTA の影響

1. カンボジアの主要産業

カンボジアの産業別 GDP（名目）の構成比を他の ASEAN 諸国と比較すると、農林水産業（第 1 次産業）とホテル・レストラン（第 3 次産業）の比率が相対的に高く、電気・ガスなどの公益業（第 2 次産業）が相対的に低い。

第 1 次産業比率が高いのは、経済の発展が他の ASEAN 諸国に比べて遅れているためとも考えられる。各国の第 1 次産業比率をみると、1 人あたり GDP の水準が低いミャンマーとカンボジアが相対的に高く、水準の高いシンガポールとブルネイの比率は低い。

カンボジアのホテル・レストラン業の構成比が高いのは、アンコールワットに代表される遺跡によって、観光関連の産業が恩恵を受けているためである。

図表 22-1 名目 GDP に占める産業の構成比

	ミャンマー (1人あたりGDP[ドル]: 2011年) [対象年]	カンボジア (853) [2010]	ラオス (1,320) [2011]	ベトナム (1,374) [2010]	フィリピン (2,345) [2011]	インド ネシア (3,512) [2011]	タイ (5,395) [2011]	マレーシア (10,085) [2011]	ブルネイ (38,534) [2011]	シンガ ポール (49,271) [2011]	平均
第1次産業	36.4%	36.0%	29.3%	18.8%	12.8%	14.7%	13.3%	12.0%	0.6%	0.0%	17.4%
第2次産業	26.0%	23.3%	29.1%	41.9%	31.4%	47.2%	43.0%	40.7%	71.7%	26.6%	38.1%
鉱業	0.9%	0.6%	8.0%	11.5%	1.5%	11.9%	3.6%	10.5%	56.5%	0.0%	10.5%
製造業	19.5%	15.6%	9.9%	20.2%	21.0%	24.3%	34.0%	24.6%	11.8%	20.9%	20.2%
公益業	1.0%	0.6%	4.8%	3.5%	5.5%	0.7%	2.8%	2.3%	2.7%	4.2%	2.8%
建設業	4.5%	6.4%	6.3%	6.7%	3.4%	10.2%	2.6%	3.2%	0.7%	1.5%	4.6%
第3次産業	37.6%	40.7%	41.7%	39.3%	55.8%	38.1%	43.7%	47.3%	27.7%	73.4%	44.5%
商業	19.8%	9.9%	21.8%	15.2%	17.4%	11.1%	12.8%	13.8%	3.2%	17.4%	14.2%
ホテル・レストラン	0.0%	4.8%	0.8%	4.3%	0.0%	2.6%	4.9%	2.7%	0.0%	2.4%	2.2%
運輸・通信	13.8%	8.1%	5.3%	4.2%	6.4%	6.6%	6.8%	6.3%	3.0%	11.8%	7.2%
金融	0.1%	1.5%	0.8%	2.0%	7.0%	3.2%	4.6%	7.4%	2.8%	11.9%	4.1%
不動産・ビジネスサービス	1.8%	5.8%	3.0%	3.5%	11.5%	4.0%	2.3%	4.9%	2.2%	14.1%	5.3%
その他サービス	2.1%	10.7%	9.9%	10.1%	13.5%	10.5%	12.3%	12.3%	16.5%	15.8%	11.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(注) 10 カ国の平均値に対し、+1 標準偏差より大きい数値を黄色で、-1 標準偏差より小さい数値を水色でシャドーしている

(出所) 各国統計資料より作成

一方、日系製造企業の進出が進んでいるとはいえ、まだ製造業の経済全体に占める比率は 15.6%とラオス (9.9%) やブルネイ (11.8%) に次いで低く、製造業の育成は遅れている。図表 22-2 で製造業の内訳をみると、縫製業（繊維・衣類・履物）が製造業の殆どを占めていることが分かる。2010 年時点の縫製業の構成比は 63.7%。1999 年 (44.8%) から

2004年（70.7%）まで急上昇したが、2008年以降は徐々に低下している。

縫製業とは対照的な動きとなっているのが、「食料品、飲料、タバコ」産業である。但し、縫製業にしても食品加工業にしても軽工業であり、加工組立あるいは資本集約型の産業は育っていない。2010年の貿易統計では、機械・車両の輸出が全体の4.5%を占めるまでに至っているが、産業別（小分類）の統計には、まだ資本財関連の産業の構成比が変化している兆しは窺えない。

図表 22-2 製造業の内訳(名目 GDP)

	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
食料品、飲料、タバコ	27.3%	19.9%	18.1%	15.5%	14.4%	12.5%	13.3%	12.0%	12.5%	14.3%	15.8%	15.5%
繊維、衣類、履物	44.8%	57.5%	63.7%	66.8%	68.0%	70.7%	68.9%	69.8%	69.7%	67.0%	63.4%	63.7%
木材、紙製品、印刷	8.6%	5.9%	3.9%	3.8%	3.1%	3.0%	3.2%	3.1%	3.3%	3.7%	4.1%	3.9%
ゴム製品	3.2%	3.1%	2.3%	2.5%	3.3%	3.0%	2.7%	3.3%	2.4%	2.4%	2.7%	3.2%
その他	16.2%	13.6%	12.0%	11.5%	11.2%	10.8%	11.9%	11.9%	12.0%	12.6%	14.0%	13.7%
製造業計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(出所) National Institute of Statistics より作成

2. 縫製業

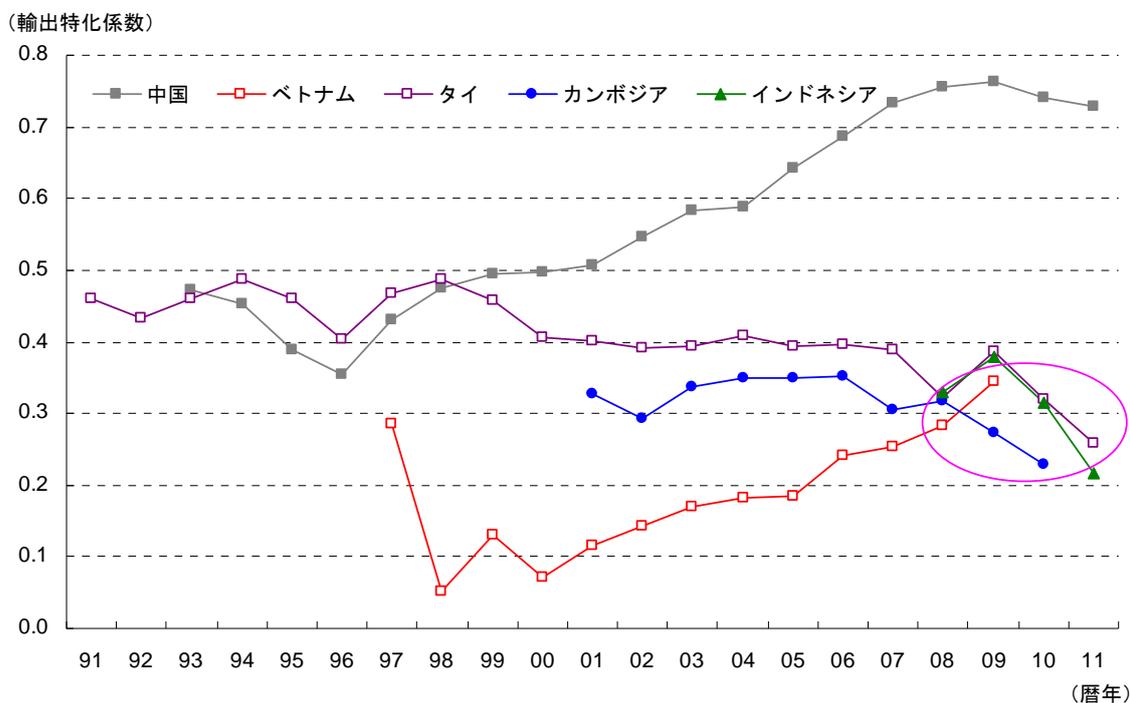
(1) 縫製業の輸出競争力

足下、カンボジアの主要産業は縫製業である。他国に比べて低い労働コストを生かし、海外から生地等を輸入し、製品を海外に輸出している。カンボジアの輸出の半分は、「衣類」が占めている。貿易収支がほぼ均衡している同国にとって、縫製業は外貨を獲得する重要な産業である。

カンボジアの縫製業の国際競争力は、他の縫製輸出国と比べても低くはない。衣類関連の国際競争力を表す輸出特化係数 $\{(輸出 - 輸入) \div (輸出 + 輸入)\}$ は 0.23 (2010年)。カンボジアでは国内で繊維や生地の調達ができず、生産量の拡大に合わせて輸入が増加してしまうため、国内調達できる中国 (2011年: 0.73) に比べれば輸出特化係数は低い。しかし、カンボジアと同様に米国や日本等に衣類を輸出しているタイ (同: 0.26) やインドネシア (同: 0.22) とほぼ同程度の水準にある。

カンボジアの輸出特化係数を時系列でみると、2001年から2008年までは0.35前後で推移していたが、2009年、2010年と低下している。これは、主な向け先の米国の需要がリーマン・ショックの影響を受けて低迷し、輸出が減少したためである。足下においては、米国向け輸出が回復していることや、生産コストが上昇してきた中国からのシフトが期待されるため、輸出特化係数の改善が期待される。

図表 22-3 衣類関連の輸出特化係数の推移



(注) 輸出特化係数 = (輸出-輸入) ÷ (輸出+輸入)

(出所) 各国資料より作成

(2) 中国からの生産シフトが進む

米国や日本の衣類を生産しているのは主に中国である。2012年時点、米国では輸入の内訳の39.4% (SITCコード=84) を、日本では74.4% (概況コード=80701) を、中国が占めている。

しかし、近年、中国で人件費の上昇が進んでいることもあり、徐々にではあるが、調達先の中国一辺倒の脱却・分散化が進んでいる。中国からの輸入比率は、米国では2010年をピークに、日本では2009年をピークに低下している。中国からの生産シフトの恩恵を受けているのが、東南アジアや南アジアの国々である。

2008年と2012年との国別輸入比率をみると、米国での分散先は、ベトナム(6.7%→8.5%)、インドネシア(5.3%→6.0%)が、日本での分散先は、ベトナム(5.03%→8.17%)、ミャンマー(1.16%→2.62%)、インドネシア(0.70%→2.16%)、バングラデシュ(0.29%→1.86%)が大きく伸びている。

カンボジアについては、米国での比率はほぼ3.0%で推移しているが、日本での比率は0.04%から0.92%へと上昇しており、中国の比率低下(同:81.20%→74.40%)の受け皿として、カンボジアにも生産がシフトしていることが窺える。

図表 22-4 米国の衣類輸入先の推移

		2008年			2009年			2010年		
		国名	100万ドル	構成比	国名	100万ドル	構成比	国名	100万ドル	構成比
1		China	28,576	34.7%	China	28,204	39.1%	China	33,493	40.9%
2		Vietnam	5,528	6.7%	Vietnam	5,329	7.4%	Vietnam	6,208	7.6%
3		Indonesia	4,358	5.3%	Indonesia	4,153	5.8%	Indonesia	4,769	5.8%
4		Mexico	4,250	5.2%	Mexico	3,580	5.0%	Bangladesh	4,154	5.1%
5		Bangladesh	3,657	4.4%	Bangladesh	3,579	5.0%	Mexico	3,783	4.6%
6		India	3,412	4.1%	India	3,126	4.3%	India	3,422	4.2%
7		Honduras	2,741	3.3%	Honduras	2,157	3.0%	Honduras	2,542	3.1%
8		Cambodia	2,508	3.0%	Cambodia	1,949	2.7%	Cambodia	2,320	2.8%
9		Thailand	2,239	2.7%	Thailand	1,764	2.4%	Thailand	1,938	2.4%
10		Italy	1,757	2.1%	Pakistan	1,467	2.0%	El Salvador	1,680	2.1%
		全体	82,466	100.0%	全体	72,055	100.0%	全体	81,938	100.0%

		2011年			2012年		
		国名	100万ドル	構成比	国名	100万ドル	構成比
1		China	34,946	39.4%	China	34,693	39.4%
2		Vietnam	6,956	7.9%	Vietnam	7,445	8.5%
3		Indonesia	5,396	6.1%	Indonesia	5,284	6.0%
4		Bangladesh	4,696	5.3%	Bangladesh	4,643	5.3%
5		Mexico	4,086	4.6%	Mexico	3,970	4.5%
6		India	3,633	4.1%	India	3,352	3.8%
7		Honduras	2,759	3.1%	Honduras	2,712	3.1%
8		Cambodia	2,683	3.0%	Cambodia	2,640	3.0%
9		Thailand	1,865	2.1%	El Salvador	1,883	2.1%
10		Pakistan	1,840	2.1%	Thailand	1,817	2.1%
		全体	88,598	100.0%	全体	87,974	100.0%

(出所) U.S. Department of Commerce より作成

図表 22-5 日本の衣類輸入先構成比の推移

	2008	2009	2010	2011	2012	08 to 12
中華人民共和国	81.20%	81.24%	80.53%	77.54%	74.40%	-6.80%
ベトナム	5.03%	5.72%	5.94%	7.36%	8.17%	3.14%
ミャンマー	1.16%	1.36%	1.57%	2.34%	2.62%	1.46%
インドネシア	0.70%	0.81%	0.93%	1.37%	2.16%	1.46%
バングラデシュ	0.29%	0.61%	1.10%	1.34%	1.86%	1.57%
インド	1.22%	1.28%	1.29%	1.36%	1.45%	0.22%
カンボジア	0.04%	0.24%	0.48%	0.77%	0.92%	0.88%
タイ	0.55%	0.47%	0.46%	0.45%	0.50%	-0.05%
フィリピン	0.41%	0.36%	0.29%	0.31%	0.26%	-0.15%
ラオス	0.03%	0.04%	0.05%	0.08%	0.13%	0.10%
その他	9.36%	7.88%	7.34%	7.07%	7.53%	-1.83%

(出所) 財務省 (日本) 資料より作成

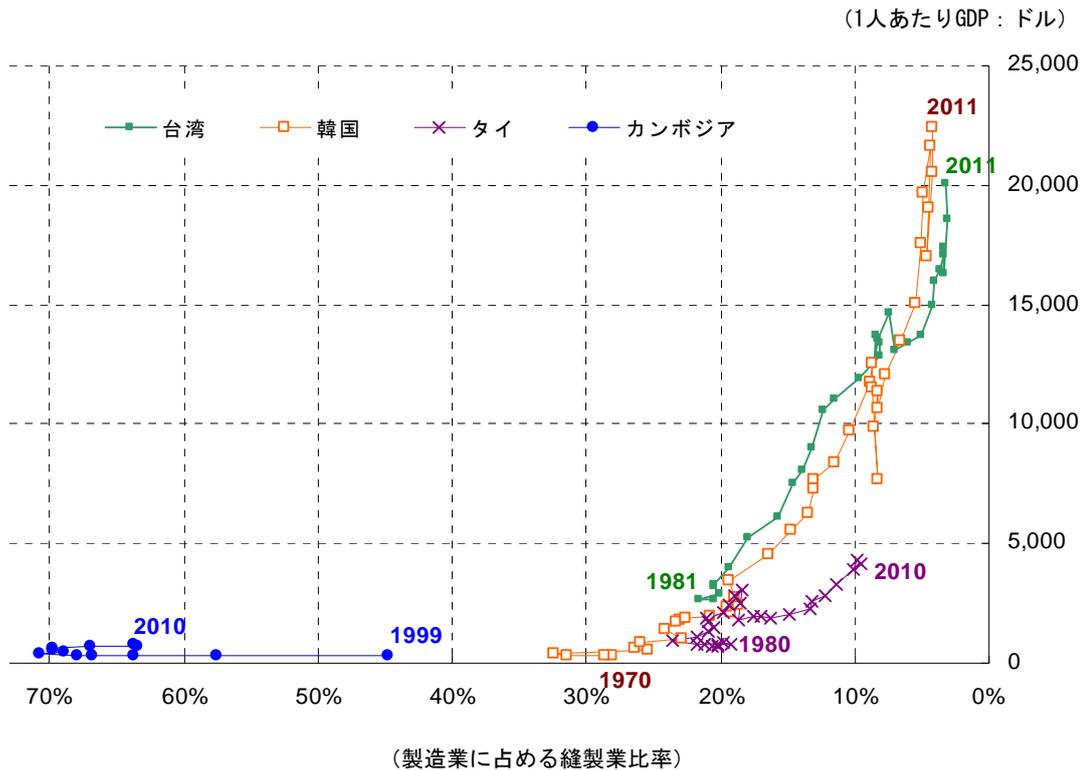
(3) 縫製業だけでは経済の発展は見込めない？

縫製業がカンボジア製造業の中心にあるが、長期的に同国の経済が一層発展するためには、縫製業に次ぐ製造業または縫製業に代わる製造業の台頭が必要となろう。

東アジア諸国の経済発展（1人あたりGDP）と産業構成比の推移をみると、1980年代の台湾、韓国や1990-2000年代のタイでは、製造業における縫製業のGDP比率が20%を下回り始めるタイミングで、発展スピードが早くなる傾向が窺える（図表22-6）。これらの国では、同時期に自動車を含む輸送機器産業や電気機器産業等のように、雇用者1人あたりの付加価値額の大きい産業が育っている。

カンボジアの縫製業が製造業に占める比率は、徐々に低下しているとはいえ、2010年時点ではまだ60%を上回っている。今後、機械や車両の輸出の構成比が上昇すれば、同国の経済発展は加速すると予想される。

図表 22-6 縫製業比率と経済発展



(出所) IMF、各国資料より作成

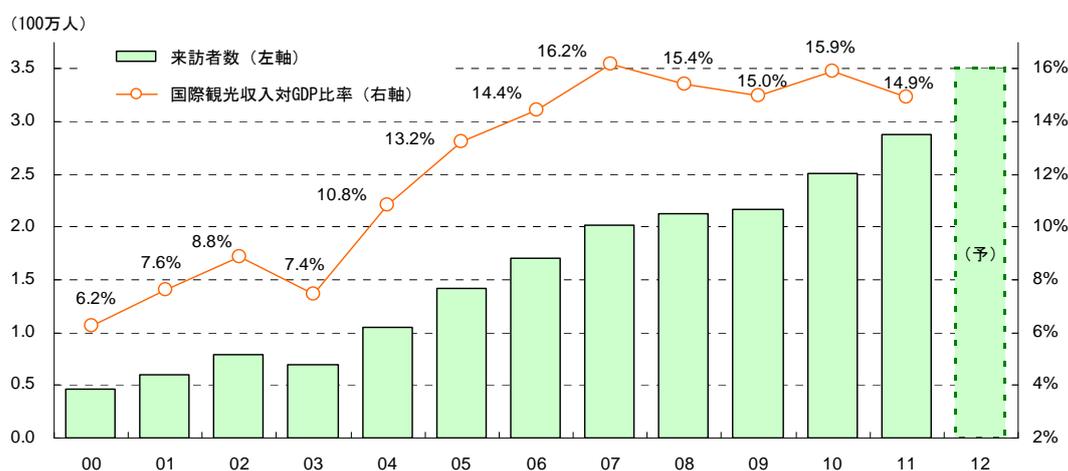
3. 観光業

(1) ASEAN 諸国の中でも観光業の与えるインパクトは大きい

カンボジアでは、国内外からの投資の内、ホテル建設やリゾート開発など、観光業に関連する案件が全体の 5 割以上の額を占めている（認可ベース）。また、政府による観光業振興支援が継続的に行われており、SARS の影響が大きかった 2003 年を除いて、海外からの来訪者数が増加を続けている（図表 22-7）。産業別 GDP ではホテル・レストラン業が 4.8% を占めており、同比率は ASEAN 諸国ではタイ（4.9%）に次いで高い。

海外からの訪問者による国際観光収入は 19 億ドル（2011 年）。国際観光収入の名目 GDP 比率は 14.9% と ASEAN 諸国の中では最も高く、2 位のタイ（7.6%）との差も大きい。カンボジアの同比率は、2004 年以降、10% 超の水準が続いている。

図表 22-7 カンボジアの来訪者数と観光業収入の対 GDP 比率の推移



(出所) Ministry of Tourism of Cambodia , World Tourism Organization , World Bank 資料等より作成

図表 22-8 観光業収入の対 GDP 比率の比較

国名	来訪者数 (万人)	国際観光収入対名目GDP
カンボジア (2011年)	288	14.9%
タイ (2011年)	1,910	7.6%
シンガポール (2011年)	1,039	7.5%
マレーシア (2011年)	2,471	6.3%
ラオス (2010年)	167	5.3%
ベトナム (2011年)	601	4.5%
ブルネイ (2009年)	16	2.4%
フィリピン (2011年)	392	1.4%
インドネシア (2011年)	765	0.9%
ミャンマー (2010年)	31	0.1%
日本 (2011年)	622	0.2%

(アンコールワット第3回廊)



(出所) Ministry of Tourism of Cambodia , World Tourism Organization , World Bank 資料等より作成

(2) 課題はアンコールワット以外の観光名所の創出

国別の来訪者数（2011年）はベトナム、韓国、中国、日本、米国の順に多い（ビジネス含む）。内、ベトナムからの来訪者は61万人を超え、全体の20%を超える割合であった。なお、日本からの来訪者は約16万人で、全体の6%弱。

観光業の課題は、アンコールワット以外の観光名所の創出である。

一部報道では2012年のアンコールワット入場者は200万人を超え、2011年に比べて28%増加したことが伝えられた。しかし、来訪者数自体は増加傾向が続いているものの、来訪者1人あたりの国際観光収入額は2009年以降減少に転じている（図表22-9）。また、平均滞在日数も2004年以降横ばいで推移している。

図表 22-9 来訪者平均滞在日数と1人あたり国際観光収入額の推移



(出所) Ministry of Tourism of Cambodia 資料より作成

アンコールワット以外の観光地としては、タイとの国境付近に位置するコクコン州が伸びている。同州にはペアム・クラソップ自然公園等があり、水上コテージやカジノリゾート、サファリパークなどの観光開発も進んでいる。2003年にコクコン橋が開通してタイからの入国が容易となったことから欧米人の来訪が増え、26,000haにおよぶ広大なマングローブ森をはじめとした雄大な自然が観光資源として生かされている。

しかし、2008年に世界文化遺産に登録されたプレアビヒア寺院や、南部には白砂の海岸が続くビーチリゾート（シハヌークビル州沿岸部）があるが、これらについてはまだ十分な観光資源にはなっていない。シハヌークビルでは、政府が国際空港を再開発したものの、国際線の就航には至っていない。また、プレアビヒア寺院については、周辺地区の治安の正常化、安定が重要な課題となっている。

ひとくちメモ (15) : 日本人にも人気の観光地 アンコールワット

カンボジアの観光地で最もポピュラーなアンコールワットは、カンボジアだけではなく世界の観光地のなかでも人気の高いスポットである。

旅行口コミサイトが日本人を対象に行ったアンケート、「行ってよかった世界の観光地」のランキングではアンコールワットが2011年、2012年連続で1位となった。

2011年のランキングではバイヨン寺院を擁するアンコールトムが7位にランクインしており、アンコールワット周辺の遺跡群にも多くの観光客が訪れていることが窺える(2012年のランキングはアンコールワット、アンコールトム、バイヨン寺院を含む統計)。

2012年のランキング全体では上位50位中33カ所が欧州のスポットで、上位30位中26カ所はユネスコの世界遺産に登録されている観光スポットであった。ASEAN域内国は、30位にボロブドゥール寺院(インドネシア)がランクインした。

欧州勢を差し置いて2年連続1位に選ばれたアンコールワットは、世界に誇るカンボジアの象徴のひとつと言えよう。

図表 「行ってよかった世界の観光地」上位10カ所一覧

	2012	2011
1	アンコール ワット/カンボジア	アンコール ワット/カンボジア
2	マチュピチュ/ペルー	サグラダファミリア教会/スペイン
3	ラニカイビーチ/ハワイ	マチュピチュ/ペルー
4	ウォルト ディズニー ワールド/アメリカ	ルーヴル美術館/フランス
5	ウルル (エアーズロック) /オーストラリア	バチカン美術館/バチカン市国
6	オルセー美術館/フランス	ドゥオーモ - サンタ マリア デル フィオーレ大聖堂/イタリア
7	サグラダファミリア教会/スペイン	アンコール トム/カンボジア
8	ルーヴル美術館/フランス	マウナ ケア山/ハワイ
9	アヤ ソフィア博物館 (教会) /トルコ	コロッセオ/イタリア
10	ペルガモン博物館/ドイツ	ウォルト ディズニー ワールド/アメリカ

(出所) トリップアドバイザー ホームページより作成

4. FTA の進捗状況

カンボジアは開発途上の国であるため、先進国が供与する一般特惠関税制度 (Generalized System of Preferences : GSP) の受益国の1つである。また、同国は国連が定める後発開発途上国 (Least Developed Countries : LDC) にも該当しており、海外への輸出の際に、相手国での輸入税の免除等の恩恵を受けている。このため、2012年12月時点では、同国は二国間のFTAは結んでおらず、FTAについてはASEANとの枠組みで進められているものに限られている(図表22-10)。

カンボジアは輸入の約半分をASEANから、約2割を中国から輸入している。ASEAN内でのFTA(ATIGA)では、カンボジアの対象品目の輸入関税の完全撤廃期限は、2015年中とされている。ただし、一部の例外品目についての撤廃期限は2018年までとされている。また、センシティブ品目(SL)・高度センシティブ品目(HSL)については、2017年までに関税を0~5%に引き下げる予定である。

また、対中国では2015年に、対インドでは2016年に、対韓国では2020年までに関税を0%とするとしている。また、対オーストラリア・ニュージーランドでは、2024年まで

に 85%の品目につき関税を 0%とする。

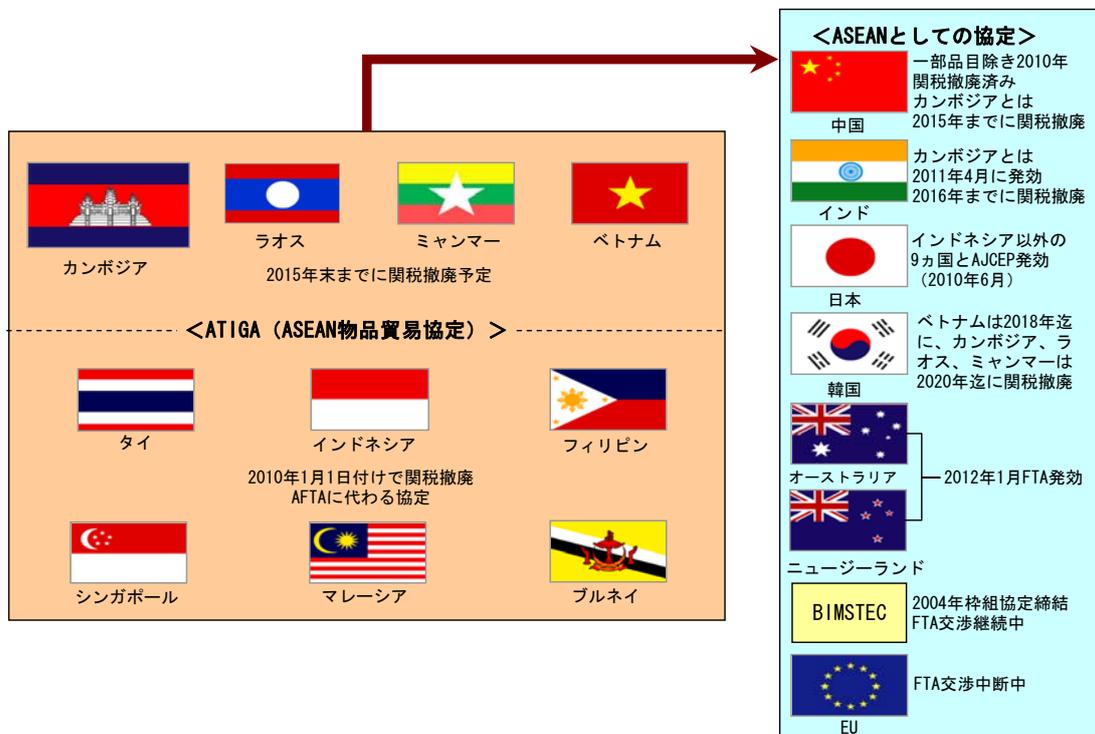
日本との ASEAN との FTA (AJCEP) については、カンボジアは 2009 年 12 月 1 日に発効した。新規加盟国は経済発展に応じた過渡的措置があり、カンボジアは 2026 年までに 85%の品目で関税を 0%とすることとしている。

図表 22-10 ASEAN との FTA とカンボジアの発効状況

	対象国・地域	協定・合意の名称	発効状況
ASEANベース	① ASEAN	ASEAN Trade In Goods Agreements (ATIGA)	済
	② 中国	ASEAN-China FTA (ACFTA)	済
	③ 韓国	ASEAN-Korea FTA (AKFTA)	済
	④ インド	ASEAN-India FTA (AIFTA)	済
	⑤ 豪州・ニュージーランド	ASEAN-Australia-NewZealand FTA (AANZFTA)	済
	⑥ 日本	ASEAN-Japan CEP (AJCEP)	済
	⑦ EU	ASEAN-EU FTA	未

(出所) 各種資料より作成

図表 22-11 カンボジアの FTA 進捗状況



(出所) JETRO 資料より作成